

中納言 参り 給ひ 御扇 奉らせ 給ふ に、

「隆家こそ、いみじき骨は得て侍れ。それを張り

せ 参らせむとするに、おぼろけの紙はえ張る

まじければ、求め侍るなり。」

と 申し 給ふ。

「いかやうにかある。」

と 問ひ 聞こえ させ 給へば、

「すべて、いみじう侍り。『さらにまだ見ぬ

骨のさまなり。』と なるむ 人々 申す。まことに

かばかりの 見えざりつ。」

と 言高く のたまへば、

「さては、扇のにはあらで、海月のなり。」

と 聞こゆれば、

「これは隆家が言にしてむ。」

と て、 笑ひ 給ふ。

かやうの ことこそ は、 かたはらいたきこと のうち

に 入れつべけれど、

「一つな落として。」

と 言へば、 いかが は せむ。

中納言様が（中宮様のもとに）参上なさって、扇をさし上げなさるときに、

「隆家（私）は、素晴らしい（扇の）骨を手に入れてございます。それに（紙を）張らせて

さし上げたいのですが、ありふれた紙は張ることができませんので、（ふさわしい紙を）探しております。」

と申し上げなさる。

「それは（どの）ようなものですか。」

と（中宮様が）お尋ねなされたところ、

「全部、素晴らしいのです。『まったく今まで見たことのない

骨の様子だ。』と人々が申します。本当に

これほどのもの（骨）は見たことがありません。」

と声高におっしゃるので、

「それでは、扇の（骨）ではなくて、くらげの（骨）のようですね。」

と（私が）申し上げると、

「これは隆家（私）が言ったことにしよう。」

と云って、（中納言様は）お笑いなさる。

このような（自慢めいた）ことは、聞き苦しいことのうち

きつと入れるべきだけれど、

「一つも書きもらしてはいけない。」

と（周りの人々）が言うので、どうしようか。

（いや、どうしようもない。）